
頑張れマルトーさん

おいちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

頑張れマルトーさん

【コード】

N0867U

【作者名】

おいちゃん

【あらすじ】

まだ料理人として未熟の男がマルトーに憑依してしまうというお話。

1話

料理人の朝は早い。

ここトリステイン魔法学院は全寮制で貴族の息子や娘の食事を常に用意しなければならぬので非常に忙しく、寝る時間は遅く睡眠時間は3時間あったら良いほうである。今日も料理人の長い一日が始まるうとしていた。

「・・・もうこんな時間か。少し急がねえとな。貴族の坊っちゃん共が喚きやがる」

大柄で少し小太りの男マルトーは、悪態をつきながらもしつかり白衣を着て帯をしつかり締めたのを確認して小走りで調理場に向かうとしていた。

しかしこの行動がすぐ後悔に変わるのに時間はかからなかった。あと10分早く起きていれば！もっと足元を見ていれば！昨夜酒を飲まなかったら！

マルトーは足元にある空の瓶に気付かず足を乗せてしまい転倒し頭部を強打してしまったのだ。

すまねえと小さくつぶやきマルトーは意識を失ってしまった。

・・・

いつも慌ただしい厨房は怒声が聞こえるが今日は不思議と聞こえない。

「なあ、マルトー料理長は今日仕入れにいつてるのか？」

「いや仕入れは昨日したばかりだぜ」

「じゃあまさか・・・寝坊か？」

「ははっ！まさか！あの人に限って寝坊はないでしょ。おいシエスター！」
可笑しそうに笑いながらコックは近くにいたメイドを呼びマルトーを探すよう頼んだ。

ここでは珍しい黒髪、黒い瞳を持つシエスタは、先ほどのコック達の話の聞きマルトーの寝坊を想像してくすつと笑いマルトーの部屋へと向かった。

部屋の前まで来たシエスタは、ノックをし元気な声でマルトーを起こそうとした。

「マルトーさんおはようございます！寝坊しちゃうと貴族様に怒られてしま・・・ひっ！？マルトーさん！？マルトーさん！！」

シエスタが見たのはうつ伏せで倒せているマルトーである。必死に体をゆするも反応はなくシエスタは怖くなって厨房へと駆け出した。貴族達の朝食は終わり片づけも終わりに近づき彼らの賄いの準備に差し掛かるうとする時である。

ドアが勢い良く開けられシエスタが息を切らしながら入ってきた。

「シエスタどうした？料理長まさか寝坊か？」

そんな訳ないだろうと笑いながら尋ねるがすぐその笑いが凍りついた。

「ハアハア・・・マルトーさんが！！マルトーさんが！！意識がありません！！」

「なんだと！？」

・・・

「大丈夫。少し頭打っただけよ。後は安静にしておけば明日には働けるから」

保険室のメイジの話聞いたシエスタは息を吐き胸を撫で下ろした。

「ありがとうございます。ご迷惑おかけしました」

「いいのよ。私は保健室に戻るからあなたも仕事に戻りなさい」

「はい。ありがとうございます」

シエスタは部屋を去るメイジに礼を言いタオルを水に浸け絞った。

「マルトーさん今日はゆっくりしてくださいね。私はお洗濯に行ってきますね」

シエスタはマルトーの額にタオルを乗せて部屋から出て行った。

・・・

「ふあああ・・・良く寝た？ここは？」

周りは見慣れない部屋で男は困惑した。もしかしたら夢かもしれないと思いい顔をツねるが痛みで顔を歪めた。

「夢じゃない・・・本当にここはどこなんだ！」

カーテンを開け外の様子を窺おうとしたがすぐに驚くことになる。

窓にはうつすらと中年の男性が映っていたのだ。

慌てて周りの確認したが誰もいない。冷静になりもう一度確認しようとして水の張った桶の覗くが更に驚く事になった。

水にはマルトーが映っていた！

男は水に映った男がマルトーだと知っている！

男はマルトーがゼロの使い魔に出てくる人物だと知っている！

男はここでの貴族と平民の係を知っている！

男はマルトーの魔法学院での立場を知っている！

男はマルトーに憑依してしまったのだ！

男は今の状況を整理する。

？おそらく自分が憑依と思われる現象に遭った

？貴族と平民の係を知っていてマルトーの立場を知っている以上
逃げる訳にはいかない

？これからはマルトーとして行動していかなければならない

「・・・やるしかないのか？」

男は調理の専門学校を卒業して2年仕出し屋で働いたが、経営不振で倒産し職安に通う生活が続いていた。

対してマルトーはトリステインの貴族が殆ど通う魔法学院の学園長オールド・オスマンが直々にお問い合わせするほどの人物だ。更に報酬も下級貴族が及びも付かない額だという。

「無理だっ！格がっ！違いすぎるっ！！」

男は頭を抱えしゃがみこんだ。

確かに知識、技術は彼とマルトーでは差がありすぎる。しかし彼にはもそれを補おうとする武器があった。

「和食・・・」

ゆっくりと頭を上げ窓から差し込む太陽の光を眩しそうに見て呟いた。

「マルトーさん入りますよ」

マルトーが眠っているときを使ってか小声で軽めのノックが鳴り、シエスタが部屋に入ってきた。

「あれ？マルトーさん起きました？大丈夫ですか？頭を打ったそうなんですけど・・・」

「ああ、すまねえ。心配かけたな。もう大丈夫だ」

どう返答しようか非常に迷った男だったが、もうマルトーではない事を悟られないようにマルトーを思わせるような言葉使いをして返答した。

「本当ですか？でも今日は絶対に安静にしてくださいね」

「ああ、迷惑をかけちゃったな」

「そんな事ありません！マルトーさんはいつも忙しいからゆっくり休む日があってもバチは当たりませんよ」

「ガハハ！じゃあお言葉に甘えて今日のところはゆっくりさせてもらおうか！俺の事はいいからシエスタ仕事に戻りな！」

「はい！じゃあ私は厨房に行きますね」

シエスタは満面の笑みで部屋から出て行った。

「・・・シエスタには悪い事してしまったな。でも仕方ないよな」
今憑依した事を皆に言ったら混乱すると判断した男はこの事は胸に秘めておこうと決めたのであった。

「しかしこの部屋汚いな。掃除でもしようか！」

部屋には本当に寝るためだけに使われているかのようで床には酒の瓶や本やらでゴタゴタしていた。

実際凄腕の料理人でも他はからつきしと言うのは珍しくない。男もマルトーがそれに当てはまるのだろうと思った。

掃除してる中ある薄汚れた本に気が付き手に取った。

「これは・・・日記？」

憑依の影響か分からないが幸いにも文字は読めるみたいで男は一安心した。

6XXX年X月X日

つたくよ。貴族のガキ共は味も分からねえ癖に味が薄い濃い量が少ないとか文句つけやがって！

しかもその癖料理は残すときた。一部の貴族は残さず全部食ってくれるからありがてえが大半は残すのは当たり前だ。どうかしてる。

他の日記を読むも愚痴の羅列に苦笑いを浮かべ本を閉じ、マルトーは良くも悪くも自信家なのだろうと判断した。

掃除が終わり少し呆けていたら昼になりシエスタが食事を持ってきてくれた。

男は初めて食べるここでの料理に眼を奪われ、恐る恐る緑色の葉のサラダを口に運んだ。

「苦い・・・これははしばみ草か？ゴーヤとホウレン草が混ざった感じだ。しかしドレッシングと合ってこれは美味しいぞ！」

料理を堪能した男はここで作る料理の構想を練りながらベットに横になった。夜になり明日に向けて男は早めに眠った。

マルチに憑依した男はこれからうまくやっていけるのだろうか？

1話（後書き）

小説書くのは難しいですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0867u/>

頑張れマルトーさん

2011年6月15日00時24分発行